

CNAC 第6回全国フォーラム

「人と海とのつながり—それでも海から学んでいこう—」

日時 平成24年2月4日（土）13：00～17：00

場所 東京海洋大学・品川キャンパス（楽水会館）

パネルディスカッション「それでも海から学んでいこう」

コーディネーター：海に学ぶ体験活動協議会理事 小池潔氏

パネラー：南三陸町立伊里前小学校教諭 阿部正人氏

NPO 法人 いわてマリンフィールド理事長 橋本久夫氏

NPO 法人日本ビーチ文化振興協会理事 遊佐雅美氏

NPO 法人 森は海の恋人副理事長 畠山信氏

司会 それでは、おそろいのようなので始めたいと思います。

フォーラムの後半です。「それでも海から学んでいこう」というテーマでパネルディスカッションをしていただきます。

パネルディスカッションは、CNACの理事の小池にコーディネートをお願いします。

それでは、小池理事、よろしくお願いします。

小池 皆様、御来場いただきまして、まことにありがとうございます。

先ほど畠山さんのお話をいただきましたが、私どもCNACはもともと若年層を中心に海離れが非常に進んでいる、海離れ、自然離れがこれ以上進んだ場合にどうなるのかという懸念から、もっと海は楽しいところだ、海にたくさん連れ出して皆さんと楽しみたい、そこから学べることもたくさんあるんだということで、幾つかの団体がまとまって団体をつくったのがCNACです。

海離れ、安全な海辺での活動に携わってきたわけなんですけれども、それが3月11日、ああいった事態がございまして、非常な被害を受けて、海辺で働く、あるいは海辺での活動に従事する私たちにとっても、一大ショックな出来事でした。懸念されたのは、これでまた海は危険なところではないか、あるいは危ないところなのではないかということで、海離れがまた進んでしまうのではないかとといったような懸念がありました。実際、自粛ムードも相まって、伊豆などではやはり海の、海洋のレジャーの参加人数が非常に激減したということもありました。

そんな中で、きょうお越しいただいております被災地で活躍していらっしゃる方、あるいは被災地にいち早く駆けつけているような活動のサポートをしている方、そういう方たちの、震災を乗り越えてポジティブに前を向いて進んでいこうという活動が成果を上げているといったことほど、私たちにとって奮い立つことはございません。

そういったことで、本日は4名の方をお招きいたしました。私のほうから簡単にお名前だけでも、向かって右側の方から御紹介させていただきます。

今、皆さんから向かって一番右側にお座りいただいているのは、橋本久夫さんです。

橋本 よろしくお願いいたします。(拍手)

小池 いわてマリ infield という、宮古を代表する、岩手を代表するマリイベントの活動をしていらっしゃるの、今、理事長をされていらっしゃいます。

次にお座りいただいているのが阿部さんです。

阿部 阿部でございます。よろしくお願いいたします。(拍手)

小池 阿部正人さんは宮城県で教職についておられまして、現在は南三陸町立伊里前小学校で先生をされておられます。非常に高度な、あるいはおもしろい環境教育の実践の活動のお話をきょうは聞けるといいなと思って期待しております。よろしくお願いいたします。

続きましてお隣が、遊佐雅美さんです。

遊佐 遊佐です。よろしくお願います。(拍手)

小池 遊佐さんの専門は、皆さん、もう御存じの方が多いと思いますが、平成6年からライフセービング世界選手権に出場しておられまして、ビーチフラッグスの競技においては4回、世界チャンピオンになっておられます。何と1994年から2009年までの間、国内で無敵の17連覇。2010年にちょっとお休みをいたしまして、2011年にはまた日本チャンピオンに復活するという、その道での第一人者でございます。子供たちにとってもあこがれのアスリートということで、海辺での活動で今も大活躍していらっしゃいます。遊佐雅美さんです。改めて、皆様、よろしくお願いいたします。

続きまして、先ほど大変貴重な地元からの声、それから非常に奮い立つようなお話をいただきました特定非営利活動法人森は海の恋人の副理事長の畠山信さんも、そのままこちらのパネルディスカッションに参加していただきますので、皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

皆様改めまして被災地から、あるいは合宿中の新潟から駆けつけてくださった遊佐さん

もいらっしやいますが、遠いところから貴重なお話をしに来てくださいました4人の方に、まずは皆さん、盛大な拍手をお送りくださいませ。（拍手）

ちょっとかたい調子で始めてしまいますと、論議がちょっと上滑りになってしまうこともありますので、ここからは、皆さん、和やかな形で、最後の1時間は皆さんのほうからの質疑応答、会場ともいろんなやりとりをしていきたいと思っておりますので、まずはこれからお一方ずつ、これまでの活動の内容を兼ねまして簡単な自己紹介と活動内容の紹介をいただければと思います。

では、まず先立ちまして、特定非営利活動法人いわてマリフィールド理事長の橋本久夫様にお話をいただきたいと思っております。

では、橋本さん、どうぞよろしく願いいたします。

橋本 皆様、こんにちは。いわてマリフィールド理事長を仰せつかっております橋本久夫と申します。

岩手県は宮古市から参りました。けさ5時に起きて、東京に着いたのが12時ちょっと前でした。相変わらず新幹線に乗るまでが2時間ちょっとかかる、本州最東端に位置しております宮古市でございます。宮古市も合併しまして、人口は6万人弱なんですけど、面積が何と日本で8番目の大きさになりまして、盛岡が隣の町なんですけれども、私の住んでいる町から2時間ちょっともかかりまして、それだけ広大になりました。「森・川・海」と人が共生するやすらぎのまち宮古ということで、そういうキャッチフレーズを掲げながら、また震災復興に向けて今さまざまな活動を繰り広げているところでございます。

そうした中で私はNPO法人を立ち上げまして、さまざまな活動をこれまで行ってきました。本当に2011年3月11日以降からかなり変わってしまったんですけども、それまでの活動を皆様に御紹介したいと思っております。

小池 済みません。機械の調子が思わしくないの、少々お待ちください。

橋本 私どものNPOは、岩手県宮古市、宮古湾を中心に活動しておりまして、今現在まで、3月11日まではリアスハーバー宮古というヨットハーバーがありまして、その指定管理者としてそこを活動拠点にしてさまざまな活動をしてきた、そういったところを活用していろんな活動をしてまいりました。

基本的に私はヨットの専門でございました。それと、学生時代からディンギーのヨットをずっとやっておりまして、そうした中で宮古湾を含めたいろんなヨットレースをやりながらも、地元の海の活用を何とかやっていきたい。ヨットレーサーとして子供たちを育成

していた中でも、やはりこれはヨットだけではなくさまざまなマリンスポーツを融合した新しい海からのまちづくりをしていこうということで、2002年にNPO法人いわてマリフィールドを立ち上げました。

そこでは、もちろんヨットもそうですし、シーカヤックをやっている方、ダイビングをやっている方、ボートセーリングをやっている方、とりあえずそういったあらゆる水に親しむ方をみんな集めて、一緒になって宮古湾でさまざまなマリ活動をしていこう、それがマリンスポーツの普及を初めとして社会教育の推進であったり、青少年の育成、そして環境活動をしよう、まちづくりをしていこう、国際交流もしていこうということを目的にスタートした団体でございます。

2004年に設立して、7月に認証して、現在は、去年の暮れのデータでいきますと、今現在、隊員は45名、それからサポーター会員も含めて40名ということで、約90名前後の隊員で今活動しております。職員も、リアスハーバー宮古というヨットハーバーを指定管理者としてやっていたので職員2名を雇用しながら活動しておりました。それから、団体として6団体ほどが一緒になって活動しておりました。

写真が今出てこないんですけれども、まず主な活動はどんなことをしてきたかということを紹介していきます。

まず自然環境保護活動として、ゴミゼロ運動ということで、これは海辺の、浜辺の清掃活動です。私たちは当然、浜辺の清掃もするし、海底のほうまで、うちはダイビングクラブのメンバーもいますので、ダイバーの方も含めて、一斉に5月30日を1つの基準として、ごろ合わせでゴミゼロということで、5月30日の前後の日曜日や土曜日を使って広報をするとか、それからヨットやダイビングのメンバーを全部集めて集中清掃活動を行っております。

あわせて、海洋生物調査ということで、宮古湾や隣の山田湾を含めて、私たちは海の上でセーリングやカヤッキングをやっているんですが、実際に我々が活動している海の中までなかなか知る機会がないので、どういった生物がいて、どういった環境の中で湾が形成されているんだろうかということで、これも毎年、何回かに分けて海洋生物の調査活動を行っております。それをCDや映像に残して、子供たちの教材に使ってほしいとか、何かの資料に使ってほしいということで、記録をする活動を行ってまいりました。

小池 申しわけございません、橋本さん。映像が間に合いましたので。申しわけございません。皆さん、大変失礼いたしました。

橋本 これが全部の主な活動の紹介になります。

これが今説明した自然保護活動です。ゴミゼロ運動ということで、こういうふうに浜辺やヨットハーバーや海底の中まで清掃している、いろいろ環境保全活動ということの紹介です。

これは、少年少女海洋塾といいまして、ヨットやシーカヤックの基本的な体験をしようということで、このヨットハーバーを中心に行っているものです。あわせて、ロープワークですね。子供たちにもロープの結び方、シートの結び方を学んでもらおうということで、この3つをセットに年間、何回かに分けて活動しております。

これは出前講座です。学校のプールを利用しまして、カヤックとか、これは海辺から遠いまちの学校ですが、そういったところに出向いて行っているものです。ですから、さっきの少年少女海洋塾は実際に海辺に来て体験してもらっているもの、こちらのほうは海辺になかなか来られない学校に出向いて、同じようにカヤックや、こういう小さなヨットや、ロープワークで、子供たちに体験してもらおうということでやっているものでございます。

これが海洋生物調査で、先ほども言ったように、宮古湾や隣の湾がどういう状態になっているんだろうということで、調査活動をして湾内の状況を撮影したものです。

これは、そういうふうにCDにして、いろんなところに配布して教材に使ってもらったり、海の環境、湾の環境がどうなっているのかということで定点観測の意味も含めて、こういう資料をつくっているところです。

体験教室。すべての人に海原の喜びをとということで、これはユニバーサルデザインヨットというのを私たちも導入しております、2004年ごろからアクセスディンギーというのを導入して——緑のヨットですが、ユニバーサルデザインヨットを導入して、体の不自由な方とか、シルバー教室とか、あとは今、不登校の児童とか——宮古ではサーモン教室というんですが、教育委員会でなかなかメニューがないということで、私たちがそのメニューをつくって、不登校児童の1つの体験事業に加えさせてもらっておりました。もちろんヨットだけでなくカヤックでも楽しんでもらったり、こういったちょっと危険性が少ないこの黄色いヨットに乗ってもらったり、そういったことでヨットハーバーを使ってこういう体験をしているところです。会員が全部サポートしながら、安全性を重視しながらやっている体験教室です。

小池 アクセスディンギーというのは、割と初心者の方でも転覆しづらく、操作がしやすいという、身障者の方でも使えるタイプのものをお使いになられているということです

ね。

橋本 そうですね。これは便利なヨットなので、初めての方でもすぐ乗れるというものです。

これは周辺活動です。当然、子供たちを対象にカヤックをやったり、塩づくりをやったり、シュノーケリング教室をやったりということで。私たちがこういう活動をすることによって、教育委員会とうまく連携をとることによって、今、授業の中に組み込んでもらって、総合学習の時間とか、そういったもので子供たちがヨットハーバーや近くの浜辺に来て、こういうふうに体験する環境がまさしく整ってきたところです。こういうふうに中学生もどんどん集まってきて、6月から8月まで、学校の場合は平日を利用して、土日の場合はいろんな一般の体験教室ということで、年間1万数千人の方がこういうふうに体験してもらっている状況にまでなっていたところでした。

小池 申しわけございません、橋本さん。ちょっと機械の調子が悪くて、申しわけありません。

橋本 こういった活動もさることながら、あとはイベントということで、私たちは、次の映像には三陸船旅という映像が出てくる予定だったんですが、シーカヤックで岩手県の沿岸、陸中海岸国立公園が約180キロあるんですけども、それを、今、北部のほうではよく言われているのが、三半船という普通の漁師さんが使われる船を使った三半船観光というのがあるんですが、私たちはシーカヤックで船旅をしようということで、そういう観光ツアー、観光プログラムを3年間ほど続けて、岩手の海のすばらしさを再発見してもらうということをやってまいりました。

それから、その後に出てくる予定だったのは、宮古湾の横断遠泳体験というのをやっています。宮古湾は奥が深い、北に向いた湾で、湾口が北を向いているんですが、リアスハーバー宮古、私たちが拠点にしているハーバーと半島までが、一番泳ぎやすい距離が1.4キロなんですね。この1.4キロをだれでもが本当に簡単に泳ごう、みんなで泳ごうということで、宮古湾横断遠泳大会というのを、もう10年ほどになるんですが、企画させてもらっております。

これには体の不自由な方、目の不自由な方、足の不自由な方、今現在、プールでそういった方たちも泳ぐ練習をしているらしいんですね。そういった人たちに最終的に海原を遠泳させて達成感を与えるということで、今、横断遠泳大会を、参加者が大体70人ぐらいなんですが、その1割から2割の方が、体の不自由な方が挑戦してくださるという大会にな

っております。

あとは、三陸シーカヤックマラソンレースというのをやりまして、これは今、全国から150艇ぐらいのシーカヤックの愛好者が宮古に訪れてきてくれております。毎年10月の第2日曜日にやるんですけれども、今、全国でシーカヤックマラソンで100艇を超えてそういうレースがにぎやかに行われているというのはそんなないと聞いておりました。一番多いのは250艇以上が参加する奄美大島のシーカヤックマラソンが非常に有名らしいんですけれども、私どもも三陸シーカヤックマラソンとって10年前から始めまして、毎年150人ぐらいの選手が参加してくる大会になっております。

去年3月11日の震災ですべてのヨットや施設が流されたんですけれども、愛好者からの声が、「どうするんだ。やるんですか」というようなことで、全国からそういう声がありました。私たちが11年はもうできないだろう、海にはなかなか戻れないだろうと思ったんですけれども、あれから6カ月ほどたった10月に復興三陸シーカヤック大会ということで、レースは行わないで、みんな集めて、もう一回、宮古湾とか、そういう自然をみんなでゆっくりセーリングして、復興のシンボルとしてみんなが宮古湾に浮かぼうということで、去年の10月には何とか開催することができました。

おかげさまで、これにも150艇近くの皆さんが集まってきて、今回は初参加の人が結構多かったですね。やはり被災地に何とか目を向けたいという思いが強くて、そういう方々が参加してくださいました。

それから、毎年夏には会場のほうにポスターも掲示させてもらったんですが、宮古港ポート天国というのもずっと宮古湾のほうでも開催されておまして、いろんな実行委員会がこれまで運営されて、既に20年以上にもなるんですけれども、ここ5～6年から実はNPOいわてマリフィールドが実施主体となって主催者側の——実行委員会はつくっているんですが、実質的な運営母体となりまして、ヨットハーバーを中心にさまざまなマリンスポーツイベントを展開しております。

写真を見てもえればよかったんですけれども、マリンスポーツの体験教室は当然ですけれども、稚魚放流会をやったり、港の作業船とか、そういった船の見学をやったり、海上保安庁の巡視艇が来まして、海上保安庁の船に乗っての体験航海。それから、本当は砂浜があればいいんでしょうけれども、ないために、スロープ、ヨットを動かすスロープのところを利用して地引き網体験とか、そういったものをやったり。あとは、Tシャツデザインコンテストとか、そういうありとあらゆるものを、海に親しむ機会があるものとい

うことで、宮古港ボート天国というのは非常に楽しいイベントになっていると思います。

あわせて、私どももハーバーまつりと称しまして、フリーマーケットをやったり、海のもの、魚介類を食べさせたり、販売したりということで、ヨットハーバー全体をヨットだけじゃなくいろんな人の交流の場にしようということで、そういったことに施設も活用させてもらっているところでございます。

そこは当然ヨットをやる場所なんですけれども、私はジュニアヨットクラブ、子供たちのヨットのほうで実際にやっております、その中で2004年度から海外のヨットクラブとの交流を始めさせていただきました。現在ニュージーランドのオークランドにあります2つのヨットクラブと、それから南島にありますネルソンというまちのヨットクラブ、この3つのヨットクラブとの相互交流事業ということで、冬にこちらから、宮古のほうから宮古の子供たちをニュージーランドに派遣して、反対に向こうが冬の、こっちが夏のときにニュージーランドの子供たちを宮古に受け入れて、ホームステイしながらヨットの体験とか、いろんな交流とか、そういったものをやりながら、地域の、地方の子供たちでもこういう国際交流ができるんだよということを、ヨットが下手でもいろんな文化も学ぶ、異文化を学ぶ機会にもなるんだということで、今現在そういうニュージーランドの青少年交流事業もやっております。ただ、3月11日以降、またどうするかということで、去年はできなかつたし、また24年、今後、もう一回ゼロから、一からスタートということで取り組んでいければいいのではないのかなとは思っているところでございます。

小池 ありがとうございます。

画像が一部映りませんで、橋本さんには大変御迷惑をおかけいたしまして、申しわけございません。皆様のお手元にお配りしております資料の中に、NPO法人いわてマリフィールドの、きょうお持ちいただきました写真の一覧表などがございますので、そちらのほうをごらんいただきまして、さらにまた機器などが復帰しましたら、全体討議などの場でもまた御紹介させていただきたいと思っておりますので。

橋本久夫様は、活動テーマということで、海に学び、海に親しみ、海を活用する、この3つを挙げていらっしゃるしまして、それに基づく実践活動をずっと続けておられたということで御紹介させていただきたいと思っております。後ほどまた被災での活動やそのときの印象、あるいは引き続きこの先の展望などにつきましては、また皆様とあわせてお伺いしたいと思いますので、まずは橋本久夫さん、ありがとうございました。皆様、大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

橋本 ありがとうございます。

小池 それでは、引き続きまして、南三陸町立伊里前小学校教諭の阿部正人さんに、同様にこれまでの活動内容、それから自己紹介も含めて、御紹介や御案内をいただければと思います。こちらは画像の準備ができておりますので、阿部先生に操作をしていただきながら、御案内させていただければと思います。よろしくお願いいたします。

阿部 こんにちは。南三陸町立伊里前小学校で5年生を担当しております阿部正人と申します。よろしくお願いいたします。

勤務しているところは南三陸町で、皆さんは恐らく鉄骨の赤い防災庁舎が非常に印象深いのかなと思います。私の住んでいるところは、信さんと同じ気仙沼市というところなんですけれども、気仙沼市でも最近合併で気仙沼市になった、もともとの本吉町という気仙沼市の外れのほうの住民でございます。

それでは、これまでどのようなことをしていたかというのを紹介したいと思います。

南三陸町といえば、皆さんは想像できると思いますが、私の通勤している勤務校はこんなところで、海から見ると、真ん中に、瓦れきの向こうにうちの勤務校だけが、まあまあ何とか建っている。学校の下に商店街がありまして、200軒以上ありました。ここは歌津というまちだったんですが、55%が全半壊です。約100名の方が死者・行方不明者になっております。

私の自己紹介です。私は小学校のときにスペースシャトルのパイロットになりたかったんですけれども、今ここにおります。中学校のときは有機農業と喫茶店のマスターになりたいなど。中学校のときにそう思っていたんですけれども、今も将来の夢はマスターになりたいと思っています。高校のときには学校の先生になりたいなどと思まして、その割には農学部に入ってしまったんですね。そのときにバイオテクノロジーがはやっているときで、はやりに乗ってしまいまして。農学部なので小学校の免許が取れないので、通信教育で取りました。今は伊里前小学校というところで19年目になるんですが、今の夢は持続可能な社会、まちをつくるというのが夢の1つです。

大学を卒業しまして、子ども会というところにおりまして、新宿にあるんですが、東京都子ども会連合会というところに2年間おりました。宮城県に帰りまして養護学校に5年間、そして、私の運命を変えたであろう気仙沼市立面瀬小学というところに9年おりました。ここでの体験が今につながっていると思います。

その学校は、東北で初めて小学校で英語を始めた学校なんです、その流れで国際理

解教育、国際理解教育だけではネタが尽きるということで環境教育ということに流れていて、ESDという言葉が御存じの方も多いと思いますが、そういう研究を進めていきました。テーマが、地域や専門機関と連携した地域地球探索型国際環境教育プログラムの開発ということで、長たらしいですが、自分たちで考えて、地元で調査活動や探究活動をするんですけども、それはグローバルな視点でやっていきたいと思いますというプログラムです。それもアメリカの小学校と一緒に行ってました。

9年間そこにおいて、もう出なきゃいけないということで、次の学校、鹿折小学校というところに3年おりました、やはり似たようなことを行いました。ユネスコ・スクールという認定を受けた学校になります。そして、3年いて、今までやってきたことをほかのまちにも広げたいなと思ひまして、今のところに来ました。

今の勤務校は、もともと総合的な学習の中で、3年生はホタテの養殖、4年生はワカメ、5年生はカキという体験活動はしているところだったんです。それは漁協や水産会社や公民館が連携したプログラムで行ってました。公民館さんにはライフジャケットがあつて、学校にはないのでそれを借りに行って、そういうこともしてました。信さんのところの唐桑もそうなんですが、公民館がかなり学校教育にかかわってくれるという地域でした。

一昨年は4年生を担当しております、ワカメを500キロとここに書いてあるんですけど、もう少し少なかったのかなと思いますが(笑)、収穫して。こっちは読売の地方紙なんですけれども。収穫して、いっぱいといれ過ぎても始末に困るんですね。「さあ、だれに。どうしよう」と。今までは売っていたらしいんですけども、製品としてはかなり手をかけなければいけないので、差し上げるならもらってもらえるかなということで、地域の老人ホームに持っていったり。あとは、給食ですね。給食センターに持って行って、自分たちの育てたワカメや何かも自分たちのメニューで食べたり。あとは、内輪で食べていたのではしょうがないので、自分たちのやったことをアピールしに仙台まで行こうと。仙台もただ仙台ではおもしろくないので、宣伝したいのでということで県庁にあるレストランに無料で提供して、これでランチをつくってくださいとお願いして。そうしたら、つくってくれるということで、それも自分で食べてくる。そこのお客さんに、自分たちがこんなことをして育てたワカメですよということを宣伝してくるということで、コミュニケーションをとりながら自分たちのやっていることの価値づけをしていきたいなと思ひて取り組んだのがこれでした。

こんなリーフレットをつくってお配りしたところです。

このワカメの活動は前もやっていたんですけど、僕がちょっとつけ加えたのは、協力者をふやしたわけですね。僕は自分でできないものですから、いろんな人とやるのが得意わざというか、海野さんにもこの間、震災後、来ていただいて授業をしていただいたり、信さんにも来ていただいたことがありますし、そういうことで授業づくりをしていきました。

ただ、ワカメというんじゃなくて、このときは、僕が初めて転勤していったときに、いろんな地域を見渡したらおもしろいものがないかなというところで、シロウオという魚を見つけたんですね。川でシロウオという——皆さんも御存じだと思うんですが、踊り食いをするシロウオなんですけれども、そこだけ上がってくるんです。その地域では伊里前川にだけかなり上がってくるんですね。何でだか、わからないんですけども、これはおもしろそうだなと。

地域の人に聞いて、子供たちと一緒に授業をしていくうちに、きれいな川であるというのがすごく重要だということがわかった。田東山という山があって、地下水がわき出るところがある。河口のほうに結構あって、石がごろごろしているんですね。伊里前川というのは長い川じゃないので、かなり河口付近にも大きな石があって、そこにシロウオが産みつけに来るわけです。1年魚なんですけれども、海から遡上して、そこに卵を生んで、1年で死んでしまって、卵を生んでまた帰っていくという魚なんです。この魚がいるということは、川について、こういう川だからシロウオが上るんだということを、子供と一緒に学びつつ、学んだという形です。

宮城県では絶滅危惧種らしいんですけども、うちの地域ではしろうおまつりというのがあって、がんがん食べてしまっているんですけども。でも、何十年もそれでバランスがとれているということは、人とシロウオとのバランス関係がいいのかなと僕は思っているんですけども。

そんな川、川の水が流れていく伊里前湾でとれるワカメということをやって宣伝したところですよ。

もう1つ加えたのが、ワカメの遊走子の観察を加えました。自分もワカメというのはどうやって育つか知らなかったので、専門のところへ行って聞きに行くと、ワカメの一生というのはこんな形だと。雌株のところから遊走子というのがぽっと出て、それを観察することができるというので、「じゃあ、ぜひそれを見せてくれ」ということで、南三陸町にはまちの施設で自然環境活用センターというのがあったので、そこの先生に来てもらって、観察をしました。雌株は地元の漁師さんに提供していただいて、観察したんですね。

一応、川の上流、山を見に行ったり、あとは自分たちの生活排水というか、これは実は雨水から流れていくもので、すぐ海に行くものだから、そういう水にもちょっと目を向けたほうがいいよねということで、「この先、海です」という取り組みですが、沖縄の海の自然史研究所というところがあるんですけども、その平井さんという方に来ていただいてやった授業です。そのときにはMAREの授業の中の海藻バイキングというプログラムがあるんですが、それと一緒にセットでやっていただいて、海藻というのはいろんな使われ方をしているんだねという勉強もしました。

さらに、種つけをした後に、3カ月ぐらいするといきなりこんなになってしまうわけです。人よりも大きくなる。こんなに成長するということは、いかに海が豊かだねということを感じることもできましたし、スケッチした後はいただく、舌で感じることも行いました。

作業を行って、一応出荷というか、提供ということ去年はやったところでした。

そんな活動を昨年はずしたんですが、これまでどんなことをしたかということ、気仙沼では、気仙沼おむすびをつくろう、気仙沼ポスターをつくろうというのを、やはり5年生の取り組みでやったことがあります。おむすびに関しては、いろんな具を入れることで、その地域がわかるんじゃないかなと思ったんですね。気仙沼らしい具を何か探してきなさいということで、1年間取り組んだんです。気仙沼ポスターをつくろうというのは、気仙沼というのを何とか調べて、それでよそに宣伝しましょうということで、1年間取り組みました。そんな取り組みです。

長くなるんですが、さっといきますので。

一般的にはこんな気仙沼のポスターがあって、これの子供版をつくろう。でも、気仙沼のことを知らないとつukれないので、1年を通して学ぶ。一応、情報発信しよう、ほかのところに伝えよう、できれば海外の人にも伝えたいねというのをゴールにしたんですね。

最初は「気仙沼と言えば」というので出させますと、気仙沼と言えば、皆さん、御存じかどうかかわからないですが、気仙沼ホルモンというのが最近、肉のほうで有名になってきたりするんですけども、フカヒレとか、サメとか、みなとまつりとかというのを子供たちは出しました。ほかにも、給食の献立から地元の食材を探させました。そうすると、4月の給食にはメカジキが出ていました。サメ肉が出ていました。どうですかね。ほかのところでも出ますかね。そういうところだなというのがわかりました。

何でサメがとれるんだろうねというのは、私のほうでレクチャーしたんですけども、

結局、遠洋のマグロ漁をやっていますので、それにサメがかかってくるんですね。そのサメが一応、全国一とれまして、それでフカヒレの生産も全国1位、要するに世界一生産があるんだよというところもお話したところです。

では、海の手市に行くと、市場に行くと何があるんだろうねということでみんなで出し合って、5月だったら何がとれるんだろうねと、いろいろ出し合ったんです。出し合った後で見学に行きました。これがサメです。サメがこんなふうに積み重ねられているんですね。血だるまなんです。聞くと、血だるまなのが新鮮な証拠だそうなので、アメリカの教員が見学に来ると、とても見られたものじゃないとか、ビデオを撮るときに、「ここから先は気をつけて見るように」みたいなのをに入れて撮影していましたね。

そのときに、これに注目させました。MG I。いろんな船が来ているということに気づかせたかったですね。MG Iというのは宮城の船だ。ITだったら岩手の船だ。そうすると、それで探していくと、いろんな県の船を探ることができて、「ああ、三陸にはこんなにいろんな船が来ているということは、魚が豊かなんじゃないか」ということに気づくこともできましたし、市場の中でもいろんなものを探して歩いたりします。

これは氷の水族館があるんですけど、70種類ぐらい氷の中に閉じ込められて、生の魚がいるんですが、これも実はこの水族館には秘密があるんだと子供たちに言ったんですが、こうやってきれいに凍らせる技術というのは、気仙沼の昔から持っている技術なんです。1週間ぐらいかかって凍らせるらしいんですけど、日本で一番古い製氷工場とか、冷凍工場ができたのが気仙沼なんだそうです。

三陸の豊かさというのは何だろうねということで、黒潮と親潮がぶつかるような、こんなふうに湧昇流が巻き起こって豊かなプランクトンが発生するんだというのを見せたり、人工衛星から見るとこんなふうに見えるんだよと見せたりもしております。

もう一回、岸壁に行って、漁師さんの話を聞いて、メカジキの突きん棒漁をしている漁師さんに話を聞いたところです。これがメカジキのここの部分です。ここの部分を切ってもらったんです。普通は持ってこないそうなんですけれども、子供たちのためにわざわざ持ってきてくれて。そうしたら、もう大喜びで、刀のようにして持ち帰って、肉がくっついていてるんですけど、それは花壇に埋めておいて、半年ぐらいして肉がなくなったところで掘り出すという約束にしたんですが、盗掘に遭いまして(笑)。うちのクラスのメンバーの中でどうしてもあれが欲しかったのがいたんですね。僕はしらばっくれて、もうあいつだとわかっているんですけど、「なくなったんだよね」と言いながら。しばらくしたら、

違う箇所から発見されましたけれども（笑）。

カンノさんという漁師さんにお話を聞いて、カンノさんからは「三陸の海にはこんなものがあるんだ」というのを話で聞いたんですけれども、例えば、マンボウ、カメ、あとはクジラもいるんだということは話では聞いているんですが、写メしてもらって送ってもって、本当にいるんだねと教えてもらいました。

あとは、最後には、僕のプログラムはいつも食べるんですけれども、いろんな人の協力で地元のメニューを集めて食べました。このときは、突きん棒でとれたメカジキをカレーにして食べました。以前は気仙沼では普通に食べていたらしいです。多分、肉よりも安かったからメカジキのカレーだったんだと思いますが、御父兄には余り好評じゃないんですね。イメージが悪いみたいで。ところが、子供たちはおいしく食べました。一応フレンチのシェフとすし屋の親方とがゲストじいちゃんに来て一緒につくったので、まずいわげがありません。

それで、感想です。新聞で紹介していただいたりしました。

あとは、地産地消メニューというのがあったんですけれども、給食に出たんですが、本当にこれが気仙沼らしいのかなというのをディベートしたり、それを感想文で書いて子供たちが新聞に投稿したり、そんなこともしてあります。

でも、それだけでは気仙沼はわからないということで、実際にお店に行って、自分たちでお金を払っていろんな店に行って食べて歩いて、自腹で取材した。こういうサブタイトルはどうなんだろうなと思うんですけど（笑）、「サメ・マグロ 自腹で取材」だそうです。県内版に大きく取り上げられました。ラーメンとか、これはマグロなんですけど、500円です。すし屋に行って、回らないすしを食べたり。そんなこんなして。あとは、これはチャウダーですね。こんなものを食べて歩いて。

最後には「そういう気仙沼ってどうなの？」ということ、新聞社の方に価値づけしてもらおうと思ひまして、気仙沼は食がすごくいいんだよという講話を聞いたりしました。

最後にはポスターにまとめて発信した。

これだけの関係機関にお世話になりました。信さんも入っています。あとは、すし屋とか、食堂とか、いろんなお店ですね。こういうのは私は得意なんです（笑）。いろいろつなぎ合わせたものがいろいろありまして、実は子供たちがまぐろ家さんというところのポスターの写真のモデルになったとか。今も多分まだ使われています。あとは、子供が商品のイラストを書いて、それが売られるようになったり。あとは、新聞社に投稿したり。恐ら

く我々が開発したところが今後、修学旅行や校外学習の場所になるのではないかなと思っ
ていたら震災になってしまったということです。ポスターは駅とかにずっと張られていた
んですけれども、流されていってしまいました。

私のやっていたことはこんなことです。

小池 どうもありがとうございました。阿部先生、ありがとうございました。(拍手)

まさに五感をフルに使って気仙沼のすべてを総合的に学習できる素晴らしい授業を実践
されているということだと思いますが、若干五感の中でも味覚に偏っているというか、か
なり多いなという感じがありますけれども、楽しい授業の状況がわかりまして、どうもあ
りがとうございます。

それでは、準備が整い次第、引き続きまして遊佐さんにお話を伺いたいと思います。

では、遊佐さん、お願いいたします。

少々お待ちください。

遊佐 では、私の自己紹介から先にさせていただきたいと思います。

私は、先ほど小池さんから御説明がありました、NPO日本ビーチ文化振興協会の理事
をさせていただいております遊佐雅美です。よろしく願いいたします。

現在、生まれも育ちも神奈川県川崎だったんですけれども、余り海に親しむことがなか
ったというか、1年に1回、家族で海に旅行に行くという形になっていたんですけれども、
先ほどの御説明もありましたが、私は19年前にライフセービング、ライフセーバーの活動
を初めて知りまして、人生の半分をライフセービングとともに過ごしております。今引っ
越しをしてしまったんですけれども、約10年、神奈川県藤沢市、本当に海のすぐそばで
海とともに活動をしてきました。

小池 江ノ島が今、後ろのほうで、こちらがホームグラウンド？

遊佐 はい。そうです。江ノ島を見て左側が東浜というところなんですけれども、7月
から8月まで2カ月間、こちらの海水浴場で実際に海に行って監視活動を行っております。

私の所属なんですけれども、神奈川県藤沢市の西浜サーフライフセービングクラブとい
うところに所属しています。

現在なんですけれども、新潟のほうで、2年に1回ございます世界大会に向けてトレーニ
ングに励んでいるんですけれども、約16年ぶりの大雪で、私も新潟でトレーニングをするた
めに行ったんですけれども、こんなに雪が降っているとは思わなくて、現在トレーニング
をしながら、雪かきもトレーニングの1つだと思ひまして、雪かきを中心に練習に励んで

おります。

これが実際に監視活動をしているときの写真です。

あとは、日本ビーチ文化振興協会にも私は携わらせていただいております、皆さん、ビーチといいますと、7月、8月、夏のシーズンだけ海に行くという方が多いと思うんですけれども、私たちの活動は1年を通じて、海と触れ合い、そして楽しんで、いこいの場所になるように、海の海岸の広場として創造を、そして理念として日本古来の文化——地域によってさまざまな特徴があると思うんですけれども、例えば、海でいうと、魚釣りが盛んなところでしたら、波打ち際に生けすをつくって、そこに魚を放って、子供たちが素手でつかんで楽しむ。

または、砂浜を中心として、ビーチバレー選手など——私もそうなんですけれども、トップアスリートを招いて、また講師などを招きまして、実際にビーチスポーツを楽しんでいただいております。

そしてまた、砂浜と言えば、皆さん、はだしになると思います。日本は四季が春夏秋冬とあるんですけど、実際にはだしになって、皆さん、四季を楽しんで、または砂浜が寒いときは冷たいと感じ、夏は熱い、砂が粗い、細かいというのを、足の裏で体験してもらっております。その体験をすることで、健康づくり、または青少年の育成にも努めております。

はだしになるということは、やはり海辺がきれいでないといけませんので、環境の美化活動にも参加しております。

1年に大体5カ所なんですけれども、ビーチライフというスポーツイベントを行っていて、そちらの映像を流させていただきたいと思ったんですけれども、今準備をしております。今回は……。

大丈夫でしょうか。

小池 はい。

遊佐 声のほうが入っていたんですけれども、ちょっと調子が悪いみたいなので、私のほうが説明をしながらやらせていただきたいと思います。

こちらは5月のほうですけれども、夏のシーズンの前に広島県の呉でビーチライフイベントを行っておりました。

このビーチライフイベントは子供から大人まで、はだしで楽しめるイベントとなっております。

もし何かけがをしてしまったらということで、事前にエントリーをして、お名前や御住所を聞いております。

私も広島の呉というところは初めて行ったんですけども、呉はとても食べ物がおいしいですね。呉の軍艦カレーやさまざまな食べ物も、私はスポーツを通じて、そして食べ物を通じて、広島のスバラしさを知ることができました。

こちらが、私が得意とするビーチフラッグスという競技なんですけれども、今ちょっと探しておりますね。スタートからゴールまでが20メートルなんですけれども、これを進行方向と逆を向いて、うつぶせになって寝ております。スタートの合図とともに振り返り、20メートル先のホース、フラッグをとるという競技です。

この中で最近——ちょっと前ですかね、小学校で徒競走で順位づけをしないということがあったと思うんですけども、これは本当にホースがとれなければ、そこでレースが終わってしまう。ホースをとれば次のレースに進めるという感じなんですけれども、本当にホースをとれなかった子供たちは泣きながら悔しがって、「また来年チャレンジする」といつも言ってくれるんですけども。

これは、皆さん、子供のころいす取りゲームをしたと思うんですけども、いす取りゲームと同じような要領で、走って、とるという感じです。実際の競技でしたら、スタートから振り返りまで約1秒です。ゴールまでが3秒から4秒。余り男子と女子の差はないんですけども、ライフセービングの競技の1つであります、だれよりも速く走って目標とする場所に到達する、または救助機材を持って早く助けに行くということにつながっております。ライフセービング競技だと、海だと12種目あるんですけども、その中の1つとなっております。砂浜の格闘技といいまして、実際に皆さんもそばで見るととても迫力がありますので、ことし10月に神奈川県藤沢市で全日本ライフセービング大会がございますので、私もそこに出場する予定であります。ぜひ皆さん、応援に来ていただければと思っております。

小池 どうもありがとうございます。

遊佐さんは、ほかにもいろいろなイベントに御参加されて、世界チャンピオンと一緒に砂浜を走ることができるといったような、すばらしい青少年の活動にも御尽力されていらっしゃると思います。どうもありがとうございました。

遊佐 ありがとうございます。

小池 機械の調子が悪くて、本当に御迷惑をおかけして、御来場の皆様、申しわけござ

いません。

それでは、遊佐さんにも、皆様、拍手をお願いいたします。ありがとうございます。(拍手)

それでは、今発表していただきました各パネリストの皆様、お席のほうに一度お戻りいただきまして、これから実際のその活動の内容につきまして、あるいは、その状況などについてまたお話を伺いながらフリートークをしていきたいと思えます。

では、恐れ入りますが、よろしくをお願いいたします。

それでは、畠山さんも加わっていただきまして、改めて、皆様、どうぞよろしくをお願いいたします。ありがとうございます。

それでは、まずは橋本さんからお伺いしたいのですが、お話をお伺いした際に、一度3月11日に活動の拠点となっているところも流されてしまったということで、いろいろと御苦労もあったかと思うんですが、当時の状況、それからその後の、被災後の活動などにつきまして、トピックスなどございましたら、お話しいただけますでしょうか。

橋本 3月11日、私たちもああいう大津波が来るとは本当に想像はしなかったんですけども、私はたまたま日中、会議中で宮古市役所のほうにいました。映像がもしあれば、その宮古市市役所を襲った波があるんですが。ただ、私はすぐ飛び出してヨットハーバーのほうに向かっていきました。2日前に、3月9日にも地震があつて、それでもやはり津波が来るといふことで、指定管理者もやっていますし、本当は逃げなきゃいけないんですが、消防団と同じで私たちも……。本当にこれは今私も疑問に感じているんですね。水門を閉めに行った消防団員が亡くなっているんですが。そういう癖もついていましたんですが、とりあえず3月11日、市役所を抜け出してヨットハーバーのほうに走りました。

そうしたら、途中、土砂崩れがあつて、もうすべての信号がとまり、何か異様な雰囲気だったので、私は直感的に、これはちょっとおかしいなと思ひまして、途中から海に行くのをあきらめまして、ちょうど海辺のまちに私は住んでいるんですが——このリアスハーバー宮古なんです、この行く途中に私のうちがあつて、ちょっと奥のほうに入っているんで、自宅に寄ってうちの家族の安否を確認して、これこれこれで、もしあれだった避難所にすぐ行くよといふことで指示を出して、それからまた宮古市役所に戻ろう、そしてそこでいろんな情報を得て、これからの対策を考えなきゃいけないなと思つて、宮古市役所のほうに戻っていったわけです。

結局、海辺の国道を行ったり来たりしていたんですが、その直後に、市役所に入ろうと

したときに、右側からもういっぱい、車が避難して海辺のほうから逃げてきているので、大渋滞が起きていたので、これはもう無理だなということで、私は左にハンドルを切って、まちのほうに、西のほうに逃げました。その直後に東のほうから波がどんどん入ってきて。私はその波を見ることなく、西のほうに行って、途中の川で通行どめになって、初めて津波だということを知ったわけです。

私はそれで大丈夫だったんですが、実際、リアスハーバー宮古ではどういうことが起きていたかという、2時46分に地震が起きるんですが、宮古商業ヨット部の生徒がヨットで3艇出ていました。それから、救助艇が1艇出ていました。出艇したのが2時半です。15分後に地震が起きたんですけども、海にいた子供たちは全然揺れを感じなかったそうです。それから、指導船に乗っていた顧問の先生も、ちょっと海にはなかなか、顧問ということで余りヨットに詳しくない先生だったんですが、やはり何が起きているかは全然わからなくて、普通どおりに走っていました。

だけど、宮古湾は無風でした。そこでうちの職員が、必ずうちは無線機を携帯させるようにして、何かあれば無線で連絡をとれるようにしていたんですが、すぐうちの職員が「地震だ。津波が来るから、早く、船を捨ててもいいから、みんな戻ってきて」と救助艇に呼びかけるんですけども、なかなか対応ができない。一体何が起きているんだか、わからない。時間もたつし、ヨットは風がないので進まない。うちの職員は女の人が1人しかいなかったんです。不安で不安でしょうがない。でも、これは何とかしなきゃいけないということで、みずからヨットハーバーにあった備えつけの救助艇で海に子供たちを迎えに、救助しなければならない、船を捨ててもいいからということで、意を決して1人、海に出ていきました。

そうすると、それが大体3時ちょっと過ぎです。宮古湾に第1波が入ってくるのが3時10何分ぐらいから入ってくるんですが、その時点で風がなかったのが、迎えに行った途端に、東のほうと南のほう、東南のほうから風が急に入ってきたそうです。そして、迎えに行った救助艇よりヨットのほうが速く走って、みんなヨットハーバーにぱっと入ることができました。それで、子供たちはそれでも船を片づけようとするので、でも、「そんなことをしている暇がないんだから、もう高台に逃げろ」。学校はヨットハーバーの裏の高台にあるんです。そこに逃げろということで、みんな子供たちを避難させました。職員たちは、子供たちの着がえとか何かを全部車に積んで、後から行くからということで子供たちだけを避難させて、自分たちが出ようと思ったら、もう水門がとじられていて、堤防があって、

車を乗り捨てるしかなかったんですね。そうやって、車を乗り捨てて堤防に上がった瞬間に、津波にどんと襲われて、この後ろ側に8メートルぐらいの防潮堤があるんですが、そこを飛び越えて、そこに20世帯、30世帯ぐらいの集落があるんですが、そのまちにどんと落ちてきて、ここら辺、全部一体が被災したというところですよ。

とにかくそれ以上の体験でいうと、岩手も宮城も福島もヨットの練習はやっていたそうです。私は日本セーリング連盟にもいろいろ関係しているんですが、その中でいろいろ情報を集めたときに、その日にヨットに乗っていた子供たち、練習していた大学生も含めて、だれ一人として犠牲になることはなかったということは、私たちヨットをやっている者にとっては非常に大きな出来事だったなと。これでだれかが犠牲になったら、もう本当にこの施設にも戻れないし、ヨットというものもなかなか再開ができなかったんじゃないかなと。

2011年、このリアスハーバー宮古で北東北インターハイ、ヨットのレースが行われる予定でした。私たちも全国大会の準備を進め、子供たちも地元でのレースを含め、本当に一生懸命活動して、2011年8月のインターハイを迎えるところでしたが、すべてがこの3月11日で終わってしまって、保管していたヨット、シーカヤック、さまざまな救助艇、150艇から、あらゆる備品から、全部流されてしまって、今現在、その時点では活動が本当に途絶えてしまいました。

その後、徐々に復旧が進んで、いろんな方の支援とか、いろんな瓦れき活動とか、撤去活動から始めるようになるんですが、とりあえず3月11日はそんな状況でございました。

小池 ありがとうございます。

先ほどのお話の中にもヨットをやっていた方には1人の遭難者もいなかったということで、これは不幸中の幸いといえますか、すばらしいことだと思うんですけども、ちょっと不思議な話で、津波が来る前に岸に向かって風が吹いた。その風が吹いたおかげで戻ってこられたので助かったということですね。

橋本 そうですね。これは新聞記事にも載ったんですが、奇跡の風に救われるということで、一部のところで報道されたんですが、本当に津波風というんですかね、私は本当にそういう現象があるのかどうかはわからないんですが、あの風は本当に何だったんだろうなということを今でも不思議に思っています。

小池 そうですね。

先ほどの畠山さんのお話の中でも、生死を分けるタイミングというのがいかに紙一重で

あるかということがわかったんですが、津波の前にそういった岸に向かって吹く風がある
というようなことがもし今後の海での活動の何かの役に立つということがあると、またい
いと思います。それはヨットをやっていらっしゃる方が発信してくださる情報ということ
だと思いますので。恐らくヨットの方で犠牲者がいなかったというのは、恐らくその風で、
皆さん、戻ることができたという……

橋本 そうですね。宮古湾に関してはですね。

小池 宮古湾に関しては。

橋本 宮城とか福島の方はちょっとわからないですが。

小池 わかりました。ありがとうございました。

それでは、引き続きお伺いしたいんですが、こちらで写真を用意させていただいたん
ですが、先ほどこちらのほうが受託管理をしていらっしゃるリアスハーバー宮古の事務所
棟ということによろしゅうございますでしょうか。

橋本 はい。

小池 こちらのほうがこのような状態になった後、木造でこれは新たにおつくりになっ
た？

橋本 そうです。これはクラブハウスのかわりにしようということで、去年の秋に高知
県で南海沖地震を想定してまして、高知県の地元の木材を使った仮設住宅のモデルハウ
スを、モニターとして何とか岩手県で使ってくれないかということだったので、私たちは
うまくそのネットワークがありまして、これを今、仮設住宅なんですけれども、一応クラ
ブハウスの拠点としても、着がえるところもなければ、テントはあるんですけど物が多く
て、子供たちの更衣室もないので、それをかわりにということ、去年の秋から自分たち
で組み立てたものです。

小池 3日間ぐらいでみんなで建てて。

橋本 そう、みんなで。

小池 高校生の皆さんも一緒に組み立てられた……

橋本 そうです。ことしもう1棟、来る予定になっています。

小池 そうですか。やはり箱のそういった施設があるというのは、この活動にとって非
常に重要なことだと思いますので、こういったことで高知と連携がとれたということはず
ばらしい事例だと思います。

先ほど畠山さんも、上のほうの御実家のほうに仮の建物といいますか、それができたこ

とによって、かなり活動の幅が広がったということですので、私どもの支援ができる内容についての示唆に富んだことだかと思います。

もう1つ続けて、こちらのほうは、実際の船かどうかはちょっとわからないんですが、沖縄の漁師さんから船を……

橋本 はい。私どもも、さっきの住宅と同じように、船、トレジャーボートなんですけど、沖縄の漁師さん、それから和歌山県のほうからはプレジャーボートを、不法係留で結局、持ち主がもうわからないとか、そういった船も含めて修理をしたものとか、沖縄のものでもそういった支援がやはり全国から来ました。それを今度は私たちが介して、地元の漁師さんたちにこれをまた提供したということになります。

小池 ありがとうございます。

こういった、何が本当に必要なのかという情報発信なども必要だったかと思うんですが、通信のいろんな不自由な点もありながら、各地ともそういった本当に必要なものが必要なところに送られるような支援も行われたという事例だと考えさせていただいてよろしいでしょうか。

ありがとうございます。

そういたしましたら、引き続きまして、同様に阿部先生にも、大変恐れ入りますが、その当日の御様子とか、3月11日以降の活動などにつきましてのお話、それから実感される体験などがございましたら、お話しいただけますでしょうか。

阿部 3月11日の件については、これにも書いてあるんですけども、放送では6メートルの津波ということだったので、6メートルというのは、僕らはここまでだというのはイメージできているんですね。ここまで津波が来るというのはわかっている。避難所でもあるんです。うちの学校は消防のほうでここに避難所をつくるというふうになっていた場所だったんですけども、うちの校長が「上に避難する」と、直感でしょうか、言って、避難しました。我々が動き出したので、地域の方々も一緒に動き出したようです。それによって多くの方も助かったのかなと思います。

結局のところ、1階まで水が来まして、1階の中まで泥が入り、1カ月間、ずっと片づけ作業、掃除をしていましたし、体育館も泥が入りました。そこは数日後、全員で一斉に片づけをして遺体安置所になりました。

今回の震災ですごく感じたのは、地域の方々の生きる力が本当に素晴らしいなと思いました。その当日の夜、避難所に500人、避難していたんですけども、全員におむすびが1

個ずつ提供されました。そして、電気もつきました。それは発電機を運び入れた人がいたんです。絶対に必要になるだろうと思って、それだけは運び入れたそうです。さらに、建設業者の方がスタイロフォームを運んで床に敷きました。だから、床が冷たくなかったんですね。そのように、地域の人たちが自分ができることをやっている姿を見て、本当に我々教職員も助かったなと思います。

例えば、マスコミが来たのは3日後でした。ほとんど南三陸の中でも私たちの住んでいるところの情報が出ませんでした。マスコミは、アメリカのマスコミがやってきました。最初におりたヘリコプターも米軍のヘリでした。全然情報も物資も何も来ない状況の中で生活でした。

そんな中で5月10日から学校が再開したんですが、では総合的な学習で海の学習をしないかといったら、そうでもないんですね。私たちは漁師さんとともに学んでいこうというスタイルをとろうと考えました。復興と一緒に学んでいく。そのやっていく姿を見て学ぼうということで、ワカメの養殖も本当に種つけのところから一緒にやりましたし、さらに昨年よりも、種がないので、それをつくる装置をつくることから初めてやっております。

僕の持っている5年生は、海の様子が気になったので、海野さんに来ていただいて、地元の漁師さんと一緒に潜っていただいて、その様子を写真で紹介していただいたりして。大きなアワビはあるといえばあるねというのを見て安心できたなと思いますし。

最近、最初に市場に揚がったのはサケでした。サケが戻ってきて、復興した仮設の市場に揚がったサケだったので、我々もサケに関心を持たせるためにも、今はサケの養殖を——養殖というか、水槽で育てて観察しているところです。

以上です。

小池 ありがとうございます。

最近、漁師さんとお話をされて、何か漁師さんのお話の中で出たということがあったそうなんですが。

阿部 まだ3月だったと思います。避難所で、漁師さんが仮設のテントの中で私に、「先生、やっから」と言うんです。何だろうと思って。「子供たちのためにワカメの養殖やっから」と言うんですよ。その言葉を聞いたときに、この人は子供たちのためにやるというんだと。その言葉を聞いて私は本当に何も言えずに涙が流れたのが思い出されます。

小池 ありがとうございます。

さかのぼりまして橋本さんにもお伺いしたいんですが、震災の後、楽しみにしていた宮

古の地元開催のヨットレースがあったということでございますが、その後のヨットレースに参加された生徒の皆さんの成績、あるいはその状況というのはどういった状態だったんでしょうか。

橋本 インターハイは宮古市でヨット競技だったんですが、もう開催ができないということで、秋田県の本荘マリーナのほうに急遽お願いして、本荘市で開催してもらいました。子供たちがヨットを始めたのは、本格的になったのは大会の1カ月前、支援の船が7月ぐらいからそろって、1カ月前に何となく本格的な練習が始まったんですけども、それでも子供たちは本大会で、宮古高校は4位という成績、それから宮古商業男子も4位という成績もとりました。

小池 すばらしいですね。そういったことがあっても、海に対するモチベーションは、一部いろんな生徒がいらっやしたと思いますけど、基本的にはモチベーションは、海に対する熱意というのは変わらなかったとっていいんでしょうか。

橋本 そうですね。とりあえず子供たちは本当にインターハイという最大の目標があったんです。地元で開催するんだ、何とかいい成績を残したいんだということで、3年間、頑張ってきたので、ちょっと何か月間のブランクはあったんですが、やはり我々もそのためにサポートして、ちょっとおくれたけれども船はどこからか集めるとか、とりあえずあなたたちの夢を壊さないように、取り逃がさないようにということで、何とかその場で子供たちと一緒につなげることができました。

小池 ありがとうございます。

その後、リアスハーバー宮古に関しましては、受託の管理が、建物がなくなってしまったということで、3月末で一度中止の通告があつて、その後も活動は続けられて、2011年10月9日には三陸のシーカヤックマラソンも再開といたしますか、事故後でもあるにもかかわらず開催されたそうですが、その開催の様子はどうだったんでしょうか。

橋本 指定管理者を解除されて、本当に活動の拠点の場を失いました。でも、やはり私たちは海に出なければならぬ。そういった意味でリアスハーバーもそうだったんですが、周辺にちょっと小さな漁港があるんですよ。そこがこれからそこから出艇とか、そこがベースになるんだろうなということで、瓦れきの撤去も、ヨットハーバーも含めて、周辺の砂浜や漁港もみんなと一緒に清掃したことで、その場所も使わせてもらうことができました。今回のシーカヤックマラソンは、そのリアスハーバー宮古の裏にあります小さな漁港を会場に行いました。

先ほども説明いたしましたけれども、従来のレースではなく、鎮魂の海にもう一回戻って、犠牲者の冥福を祈りながらも、もう一回、海にやさしく出ていこうということで、スピードやタイムを競うことなく、みんなが集団となって、150艇の集団となって、宮古湾をぐるりと1周して、本当に復旧の、復興の願いをみんなで込めてもらったという大会で今回は終わりました。

小池 すばらしいですね。ありがとうございます。

先ほど畠山さんのお話の最後にもありましたけれども、こういった大きなことがありますと、子供たちも含めまして、海に対する気持ちというのがどういうふうになるのかなというのがちょっと心配な状態でしたが、畠山さんの話ですと、海を恨む気持ちはなかったんだというお話もありましたし、子供たちの中ではそういった活動が、ヨットに対する熱意が、それにまさるものがあったということで、すばらしい成果をおさめたということで、継続してすぐに再開された橋本さんを初めスタッフの皆様の御指導に敬意を表したいと思います。すばらしいと思います。

橋本 ありがとうございます。

小池 引き続きまして、3月11日の被災がありまして、その直後、4月にはもう現地入りをして、現地のサポートをしたという遊佐さんにお話をお伺いしたいのですが、遊佐さんにお持ちいただきました写真の用意が後ろにございますので、こちらのほうをごらんいただきながら御説明をいただけますでしょうか。

遊佐 私は3月11日は東京駅の地下にいたんですけれども、地下はほとんど揺れを感じなくて、何となく揺れているかなという感じだったんですね。周りに余り人もいなくて、近くにいた女の方に、「ちょっと揺れてないですか」と私は問いかけをしてみたら、相手の女性のほうも、「何かちょっと揺れていますよね」ということで、私たちも急に怖くなってしまいまして、全く知らない女同士、手をつないで、地下にいたので、もし何かあったときに逃げられないととっさに考えまして、まず地上に出ようということをしたんですよ。

そうしたら、地上に出ましたら、たくさん東京駅でも人があふれ返ってしまっていて、近くに建設現場があったんですけれども、上にクレーンが載ってしまっていて、クレーンがすごく揺れていたんですね。これはただごとじゃないなと思いついて周りを見たら、もう電車がとまっています。通信機能もだめで、ましてや電車、バス、タクシーも全く動いていない状態でした。最近、ちょっと前にわかったことなんですけど、皆さん、情報を得るためにフェイスブックやツイッターを見て、今、何があったんだろうということを知る機会があ

ったということも聞いております。そこから私もツイッター、フェイスブックを始めたんですけれども。

そのときはちょうど私の携帯にワンセグがついておりまして、家族にも連絡がつかない、ただ単にテレビを見るしかなかったんですね。テレビで映っている現状が同じ日本で起きているのかと本当にびっくりして、私は何も声が出なかった。ただ単に1人で本当に寂しい、怖いなど思ったのが、その日感じた感想です。

実際に私は4月に岩手の山田町、宮古と釜石の間の山田町なんですけれども、そちらのほうにボランティアで参加させていただきまして、当時はボランティアがまだ来てもらえないような状態ではない、人が入れるようなところではないと言われてしまって、なかなか何をしたいのか、どこに行きたいかわからない。でも、何かしたい。多分ここにいる方も皆さん、そう思ったと思うんですけれども、私は動き始めたのがやはり1カ月後だったというのが現状です。

今回、私がなぜ山田町に行ったかといいますと、実際に北海道で山岳のレスキューをボランティアでやっている方たちがいまして、その方たちが山田町でボランティアのリーダーもしているということで、今まで余り面識がなかったところだったんですけれども、山田町に行くことになりました。

ちょっと立って御説明させていただいてよろしいでしょうか。

実際に4月から山田町のほうに復興支援高速バスというのが出てまいりまして、移動手段がなかったので、そのバスで東京駅を夜中に出発して、宮古経由、山田町に入りました。盛岡に着いたときは早朝だったんですけれども、多分、夜中、お店があいていて、本当にここで地震があったのかというぐらい、私もちょっと疑ってしまった部分もありました。ただ、盛岡の市役所に行くと、自衛隊の車やそのような関係者がたくさんいて、やはりここは地震があったところだなというのを痛感したんですけれども、実際にそこの盛岡から車で1時間、行ったところで、宮古の宮古湾が目の前に広がってきました。テレビで見た映像が実際に私の目の前にあらわれたときには、何と言っていいかわからず、声も出せず、ただ、私は愕然としてしまったことを今でも覚えています。

実際に私は、山田町に入りまして、初日に、私のお友達なんですけれども、彼は船に乗りまして捜索活動に携わっていました。山田町もカキやホタテの養殖が盛んなまちで、たくさんの方が津波で流されたということで、私も初日から捜索活動に携わらせていただきました。実際にこの写真はドライスーツなんですけれども、肩から足の先まですべて水が

入らないようにドライスーツをまとって船に乗り込みました。

これが活動をしてきた船なんですけれども、実際に船に乗っている方は地元の漁師さんで、地震の当日は山の上の家でしたんですけれども、漁師さんは自分の命よりも大切な船を守るために、皆さんが車で走っているのを逆走して、船に乗って沖まで出ていったという感じでした。そのほかにもボランティアで活動している地元の漁師さんがいたんですけれども、漁師さんは実は海で息子2人を津波で流されて、私が行った当時もまだ息子さんたちが見つからない状態でした。現在は残念ながら遺体として見つかってしまったんですけれども、そのときに漁師さんと一緒に過ごした時間が私には印象的でした。

これは海から見た山田町の漁港なんですけれども、やはり建物がすべて津波で流されて、家まるごと1軒、海の中に沈んでいたり、たくさんの船が沈んでおりました。

これは漁港のほうなんですけれども、船が上に乗り上げた形で、またそれ以外にも建物の3階にも大きな船が乗っかっている状態でした。

これの真ん中に見えるのがおうちなんですけれども、このように1軒のおうちが流されて、そのままの状態がたくさんありました。

これはエンジン付きのゴムボートなんですけれども、実際に大きな船が近づけないところにゴム製の、みんなでこいでカキやホタテの養殖をしているいかだのところに近づいていきます。

これが先ほども御説明がありましたが、養殖をしているところなんですけれども、たくさんロープがありますので、ロープがかなり絡まってしまうと、周りに津波で流されてしまった洋服や家財道具などがたくさんありました。

これがそのときの状況です。

やはりこのような建物のところが流されてしまったものの中に、残念ながら御遺体として、私が初日に行ったときに、帰らぬ人となって、女性なんですけれども、1人見つけることができました。

これはみんなで活動している風景なんですけれども、水深が大体5メートルぐらいあるんですけれども、家の屋根に乗ったり、いかだの上、または流されてきた木材の上に普通に立てるぐらいになっておりますので、そこでいろんな物をどけて、もしそこに遺体があればという感じで捜索活動に携わってきました。

これは神奈川や東京から来たボランティアのダイバーの方たちと一緒に、私たちはダイバーの免許を持っていませんので、水底に潜ることができなかったのですが、ダイバーの方

ちと一緒に捜索活動に携わりました。

そして、私も実際に避難所となっているところがどういうところかということも自分で確かめてみたかったので、炊き出しのボランティアに行ってきました。よくみんなに「炊き出しに行った」と言ったら、「料理つくれるの?」ということも言われてしまったんですけども、これがそのときの様子です。

自衛隊の人たちが毎日朝、1日1回なんですけれども、食べ物を、また必要とされる日用品を持ってきてくれるんですね。私が自衛隊の姿を見るとちょっと怖いなという感想を受けたんですけども、ここの場所は保育園だったんですけども、保育園にいる子供たちが、毎日自衛隊の人たちが運んできてくれた食べ物やその他のものを一生懸命、大人と一緒に運んでくれる姿が、私にはちょっと印象的でした。

この山田町の織笠保育園なんですけれども、本当に海のすぐそばで、ちょうどこの保育園だけが高台の上に立っておりまして、この保育園だけが無事に助かったということなんですけれども、実際に真ん中に写っている方は園長先生で、私が炊き出しに行ったときに、実はボランティアの人たちはすべて食べ物とかを持っていくんですけども、私はここに行ったときに一番初めに、「コーヒー、飲まない?」と言われてたんですよ。「ちょっとお話をしましょう」ということで、とても温かい園長先生で、私も食べ物をいただけないかと思ったんですけども、この園長先生の一言が、「皆さん、ここに来てくれたボランティアの人たちに温かい食事と食べ物を食べてもらいたいの。絶対遠慮しないで食べてください」ということで、私も心の中では悪いなという気持ちがあったんですけども、いただいてしまいました。

やはり私たちは東京にいと、自分たちが送った物資がちゃんと届いているのかという不安がたくさんあって、いろんな声も聞いてきました。実際に物資もたくさん届いておりまして、必要とされるものや、被災地、あとは体育館などによって、人数によって、必要とされるものを分別されて、そこに届くことができていると思います。

これは高校生なんですけれども、たくさんの学校が流されたということで、本もなくなった、そして本を届けてほしいということで、子供たちが一生懸命温かいメッセージ、または励ましの言葉を書いた本を届けさせていただきました。

そして、私の隣にいる方は、全く私は知らない方たちだったんですけども、炊き出しのボランティアに行ったときに、この方と一緒に被災地の体育館に行ったんですけども、1人でボランティアに行くと、やはりボランティア施設の体育館では寝泊まりができない

ということを知りました。子供の方1人だと安全性または何か現地で起こっては危ないということなので、1人で来ている方は自分で、外にあるこのようなテントを持ってきて、テントを、私もどんなテントがあるんだろうなとちょっと見たかったので見させていたんですけども、本当に寝るだけのテントを持ってきておりました。

この方と一緒に回ってみたときに、まず炊き出しをしながら、あとは、「物資が届いているものをちょっと整理してもらいたいですけど」という話を聞いたときに、まず男性の方のボランティアの方が多かったので、女性の下着をどうやって仕分けしていいか、わからないということで、私も行かせていただいて、ちょっと役に立ったかなと思いました。

実際に私もボランティアに行きまして、行く前に、本当にこんな私が何かできるのか、何をしてあげる——してあげるという言い方は変かもしれないんですけども、何もできないんじゃないかと思って現地に行きました。実際に1週間ほど活動させていただいたんですけども、多分何もできなかったと思います。逆に私は出会いました保育園の園長先生の優しさと笑顔、そして頑張っている姿を見て、私もまだまだ頑張らなくてはいけないなということを実感しました。そして、私にもまだまだできることを続けて、継続していきたいなと思いました。

そして、私は被災地で感じたんですけども、実際に神奈川県鎌倉市でも、津波が来たときに、サーファーに対して津波が来るよということもどうやって知らせるのかということも、私もいろいろと不安だったんですけども、実際に鎌倉市では3月11日に津波注意報が出たときに、オレンジフラッグというフラッグを掲げて、サーファーたちに津波が来るんだよということを知らせていました。実際にサーファーたちは、いい波が来る、いい波に乗るために余り陸を見ないんですね。沖を結構見ることが多いので、そのようなオレンジフラッグというのを全国でこれからも続けて掲げていきたいということも、鎌倉の方たちがおっしゃっていました。

私は2カ月間、海水浴場で監視をしているんですけども、実際に2年に1回、津波訓練をやっておりまして、海水浴に来ている人たちに対して、津波が来た、海から上がって、海の家にある陸地まで逃げてくださいという活動をしています。これは地元の消防、警察官、海上保安庁、市の人たちと一緒に中心となってやっているんですけども、今まで避難は海の家軒下だったんですけども、今回はこの津波で感じたことは、本当にいち早く高いところに逃げるんだということを実感しました。やはり2カ月間の中で1日何万人と海水浴場に来るお客さんに対して、どうやって避難の声をかければいいのか。例えば、

防災無線も海に入っていたら、風向きによって全く聞こえなくなってしまう。例えば、家の中にも聞こえないことも多いので、いち早く気づくためには、海に来ている人たちの心構え、そして今回、津波で学んだことを、もっと知識として、自分たちの命は自分たちで逃げるということ思っていたらなと思います。

藤沢市もやはり周りに高台にはマンションがあるんですけども、ほとんどはオートロックで避難ができない状態で、私が監視をしている東浜は、近くの龍宝寺というところがありますので、その高台に逃げるということなんですけれども、やはり皆さん、海に来たときはどこに逃げていいのかわからない方たちもたくさんいると思います。例えば、お子さんを海で遊ばせるときも、皆さん自身が逃げるということ、もっと心に強く思ってやっていただけたらなと思っております。

そして、私も海が大好きです。たくさんの命が海で亡くなったと思います。また、海でたくさんの笑顔が戻るように、微力ながらこれからも活動を続けていきたいと思っております。

小池 どうもありがとうございます。遊佐さんでした。ありがとうございます。(拍手)

先ほどのこのお話の中でよく出てくるのが、先ほどの畠山さんのお話の中にもありましたが、海と遊んでいなければ津波で生き残れなかったというようなお話もありましたけれども、逆に支援にお伺いするほうも、こういったテントで寝泊まりして、自分のことはすべて自分でしなければ、ボランティアに行き、してもらうことになってしまったりしますので、自然体験活動というのは、支援するほう、それからそういった災害の防災のためにも、非常に有効なんだなということが、皆さんのお話を聞いていると実感された次第でございます。

では、こちらを受けまして、こういったその当時の状況、その直後のお話、それから直後に被災地のほうに行った遊佐さんのお話をお伺いいたしましたが、それを踏まえまして、今後の皆様方の活動について、どのようなお考えを持っているかを、橋本さんから順にお伺いしてもよろしくでございますでしょうか。一言ずつで結構でございます。

橋本 もちろん私どもは海の活動は再開いたします。ただ、ヨットハーバーそのものは県の施設でございますので、どういう復旧・復興が進められるかは、私どもはその状況はわからないので、いずれ施設がなくても、先ほどの砂浜を使うとか、そういった使える自然に素直に向き合って、もう一回ゼロからスタートしようと思っております。これはちょっと時間がかかるかもしれませんが、今までやってきた活動をもう一回見直しなが

らも、やはり海からのまちづくり……。復興計画にもいろんな提案をしているんですが、いずれ海が元気にならないと、まちも元気にならないんだらうなという思いがしております。先ほど防潮堤の話も出ましたが、これからのまちづくりにかかわっていくとき、どうしてもハードと、我々の自然と対峙するいろんな利害関係がこれから復興の中に出てくるんじゃないかなという懸念は持っています。それでも、やはり自然と素直に向き合って活動はしていきたいと思っております。よろしく申し上げます。

小池 よろしくお願いいたします。

阿部先生、お願いいたします。

阿部 今回の避難所生活というか、復興を進めていく中で、活躍されている方々というのは、僕の住んでいるところもそうだし、伊里前もそうなんですけれども、50代の自然体験豊かな方々なんです。子供のときに遊んでいる人たちなんです。本当にそうだなと思いました。いろんなスキルを持っている人たちなんです。こういう体験は絶対必要だということで、今も5年生の中で自然体験活動をさせたりもしていますし、遊びの重要性というのは本当に再認識したところ。授業の中では地域の人とともに復興を進めていくというところをともに見て、聞いて、感じて、学んでいくというところ。あとは、どうしても、今後、長い間、いろんな話し合いをしなきゃいけないなと思うんですけれども、話し合いのスキルというのは重要なんだなと。小さいときのいわゆる学級会というのはやっぱり大事だったんだなと思いました。そういうスキルも自然体験の中で、子供たちが話し合いの中で学んでいくものだなと思っている次第です。

小池 ありがとうございます。

次に畠山さんにお伺いしたんですが、この中でまだ御存じない方がいらっしゃいましたら、ぜひ行っていただきたいページがありまして、インターネットで「周回軌道」という畠山さんがつづっておりますブログがございまして、こちらを3月からずっとたどりますと、畠山さん自身の肩に振りかかるいろいろなことですか、お考えですか、そういった揺れ動くさまでとか、何が必要なんだろうかと考える非常にいいテキストになると思っていますので、まだ御存じがない方がいらっしゃいましたら、畠山信さんの「周回軌道」というブログをぜひお読みになることをお勧めいたします。

こちらは遊佐さんにも後でお伺いしたいなと思ったんですけれども、今回、被害に遭ったときに象徴的な畠山さんの遊び場だったといいますか、畠山さんの幼少時代に遊んでいたところ、九九鳴き浜というところがありまして、先ほど写真を見せていただきましたが、

そちらが震災直後にこのような状態になった。先ほどの畠山さんのところから引かせていただいたんですが、このような状態になったんですが、こちらが海野さんを初めとするボランティアの皆さんの御活躍、地元の方の協力がありまして、このような状態にきれいになって、さらには砂浜が進んでというようなお話をお伺いいたしました。

ここは私も一度御案内いただいたことがあるんですけども、直後に船から畠山さんがこの浜辺におりまして、キュッキュッと鳴ったときの畠山さんの顔が忘れられない感じがします。

これは、畠山さんにちょっとお伺いしたいんですけども、もし当時のこの状況なんですけれども、この状況でいろんなことでお疲れの状態だったと思うんですけども、ここはやっぱり象徴的なものとして、瓦れきがなくなったということで、何かモチベーションとか、そういったものが回復したといったようなことはありますでしょうか。

畠山 それはもう、瓦れきというのは見なれてくるんですね。ごくあたり前のものになっていくんですよ。それがなくなったときの快感はぐっとくるものがありますね。特に思い入れが強い、小さいころ遊んだ場所とかが、こんな感じでひどいことになったなど。でも、それを毎日見ていると、なれてくるんですよ。逆に全然違うところへ行くと、ぐっとくるんですね。疲れているときに瓦れきを見ると。支援団体のボランティアの方もそうですね。現場へ入って2日目、3日目までは、死んだ魚の目みたいな感じなんですけど、3日目、4日目になってくると、「よっしゃ、やろうか」みたいな感じになってきますので、やっぱりもとの形に戻るといえるか……。余り気持ちいいものじゃないじゃないですか。これがなくなるということは、ある意味、快樂に近いものがあると思います。

小池 ありがとうございます。

きっといろんなボランティアの方たちを含めて、さまざまな思惑を持った方とか、お考えの方がいろいろと現地を訪れたりしていますので、現地の皆さんも、ここでは言えないこともいろいろとあるだろうし、いろいろお考えになることもあると思うんですが、こういった活動に関しましては、連携がうまくいったと考えてよろしいのでしょうか。

畠山 もちろんです。ニーズのミスマッチというのは物すごくたくさんあるんですね。言えることと言えないことがいろいろあるんですけども、言えないことを聞きたい人は後で聞きに来てください(笑)。いろいろありますね。本当に心温まるものから、本当に殺意がわくようなものまでいろいろあるんですけど、こちらが、被災者側からニーズを上げるというのはなかなか難しいですよ。言っているのかどうか、わからないです。恐らく

支援される側は何をしたらいいかわからない、でも、何かしたいという気持ちでいらっしやると思うんですね。

なので、今、僕のメインの仕事は、いろんなプロジェクトを動かす、まちづくりのプロジェクトを動かすのとは別にメインでやっている仕事があって、何かというと、お見合いなんです。

小池 おお。婚活？

畠山 婚活？ ごめんなさい。そっちじゃないです。人のほうじゃなくて、ニーズのマッチング。

小池 ニーズのマッチング。

畠山 ええ。ちょうど1年たとうとして、個人とか、団体とか、企業とか、または海外の政府、海外の団体・企業が、いろんな、「そろそろいいのかな」、「聞いていいのでしょうか」みたいな感じのメールや電話があるんですね。「何をすればいいでしょう」とこっそり聞いてくださるんですね。今、被災地の現状というのはいろんなニーズがあるので。ただ、被災者を甘やかしてはいかんなどというのも大分感じる場所なんですけれども、その自立を促す感じでうまくやってくれそうだなと思う人にはいろいろ紹介——紹介というのか、「この集落のこのところをお手伝いいただけませんか」と紹介するというのが、1日の大半の時間を使うことになっているんです。

小池 わかりました。ありがとうございます。

いろいろと地元の期待も一身に背負ってやられていらっしやると思うんですけれども、御自身にとっても恐らく、昔のところでもたさらに子供たちと遊ぶといったようなことは、いろいろなよいところといますか、安らぐところもしあるようでしたら、ぜひ今後も皆さんの協力を仰ぎながらやっていかれると、素晴らしい活動だなと思います。

遊佐さん、どうでしょう。さっき海野さんからもお昼休みのときに提案がありましたけど、この九九鳴き浜でビーチフラッグスをやったら、キューキュー鳴って楽しくなるんじゃないかなという遊佐さんの話もありましたけど、象徴的な意味でこんなのも楽しいですね。

遊佐 そうですね。やはりキューキュー鳴る砂浜というのは不純物がないきれいな砂浜と言われているので。私も実際に日本ではまだキュッキュッとなる砂浜に行ったことがないので、ぜひ行かせていただけたらと思います。やはり本日、皆様とお会いできたことも、これも何かの縁だと思いますので、これからも末長く一緒にともに歩んでいけたらな

と思います。やはりこういうことを通じて私もきずなというものを、そして人との出会いを大切にしたいなと改めて思いました。

小池 ありがとうございます。

遊佐さんの炊き出しをしていらっしゃる姿にも感動しましたが、やはり世界チャンピオンですので、ビーチフラッグスで子供たちと盛り上がり、世界チャンピオンと一緒に九九鳴き浜で、あるいは東北の被災地の砂浜で楽しんだというようなことがあると、さらに盛り上がるんじゃないかなと思います。

ビーチフラッグスというのは、顔を砂に近づけますし、そこで飛んだりねたりしますので、きれいなものじゃなければできないんですね。そういうお話もお伺いいたしましたので、そういうことで、もし象徴的な形で実現すれば楽しいかなと思います。

もう1つ、先ほどまた畠山さんの先ほどお話の中から写真で引かせていただいたんですけども、新たに生まれたフィールド、森から川、湿地、干潟、海までのさまざまな自然環境がコンパクトに集まっているこのポイント、それから鳴き砂の浜も近くにあるというこのフィールドで、ぜひ畠山さんは環境教育施設が欲しいとおっしゃられているとお伺いしておりますが、そのあたりのところを、もしお考えがあればお聞かせいただけますでしょうか。

畠山 拠点、事務局や倉庫も流され、まさに何もない状態からのスタートなので、できれば自分たちで手作りできたらいいかなと思っているんですけども。お金というのはやはり必要なんですね。助成金というのは今たくさん公募があつて、ただ、それに頼らなきゃいけない部分もあるんですけども、頼り過ぎても公共事業にぶら下がっている仕事をしている人たちみたいになってしまうので、環境教育施設等でいったら、研究者がこういう大きな自然のインパクトの後の生き物の移り変わりを調べた結果というのは、世界じゅうにないんですね。こんなでかい震災があつたことはないのです。その貴重なデータをとっていけば、次に何かあつたときに役に立つんですね。そういう拠点がほしいなと。ただ、次回の津波や震災というのがもしあるのであれば、やはりちょっと高いところとか、そういうところにやっていかなきゃいけないのかなと。

小池 なるほど。ありがとうございます。

橋本さん、岩手県も、今度何かあつた場合の避難などについて見直しとか、海岸活動のいろんな見直しなどもあるようでございますが、きょうは歌津、宮古、気仙沼からお越しいただいておりますけれども、そちらのほうでの被災者同士の連携といったようなことや、

あるいはイベントのようなことも実現すると楽しいかなと思うんですが、いかがでしょう。

橋本 なかなか我々もイベントは今できていない状態ですが、いずれ、皆さんのお話を聞いてネットワークを持ちながら何かやれるなどというのを、今、実感しておりますので、本当に復興のシンボルとして海岸がいろんな形で結んでいけたら、みんなと一緒にあって復興に向けていかなければならないんじゃないかなと思っています。

小池 ありがとうございます。

いずれ私も畠山さんが経営するオイスターバーでウオッカの中にカキを入れたオイスターショットでぜひ1杯やらせていただければなと思います。それがひいては地元の雇用につながり、素晴らしい結果をもたらすような今後の……。畠山さんが九死に一生を得たというのは、こんなことを言うと失礼かもしれませんが、畠山さんみたいな人は生かされたんじゃないかなと思いますので、協力は微力ながらさせていただきたいと思いますので、今後とも夢をかなえていただきますようお願いいたします。